

と墓碑がたてられたのは、十年祭の折のこと
若王子の墓地に、ゴルドンの撰文によって

Yamasaki Tamenori

A good son
A devoted brother
A faithful friend
An ardent patriot
A superior scholar
A successful teacher
A true Christian
He rests in peace



同志社人物誌 (13)

山崎為徳

杉井六郎

であった。今年は、山崎為徳が死んでから八十三周年にあたる。山崎は、ますます遠くなったという感じである。

ところが、本誌第四号に、重久篤太郎氏は、柳田泉氏の『明治初期の翻訳文学』が再版されて、「社会的に忘却されていた山崎為徳の西洋文学移入の功績を再び読書界に伝える」(『雲峰と明治文学』)と綴じ、ついで、第九号には、手塚竜磨氏が、「シェイクスピアと同志社」の中で、山崎為徳の略歴をのべて、かれのシェイクスピア講義ならびに劇上演のことにおよんでいる。英文学移入時における山崎の果たした先駆的な役割は、再び注目されはじめようとしている。

九十年を迎える同志社が、いま一度回顧すべき人物の一人に山崎為徳がいる。私はかれの英文学上の業績の外に、かれの、もう一つ看過することのできない面である——私はそれを神学者と称するにふさわしいと思うのであるが——その信仰・伝道について、故人を探索してみよう。

初期同志社において光彩をはなったかれの生涯は、まことにほかないものであった。

かれを伝える諸伝には、『同志社五十年史』(昭五刊)、柳田泉『明治初期の翻訳文学』(昭十刊)、『後藤新平第一巻』(昭十三刊)、『植村正久と其の時代第一巻』(昭十三刊)、『斎藤実伝第一巻』(昭十六刊)などがあげられるが、意外に誤謬も多い。そこでまず、簡単な略年譜を記しておく。

山崎為徳(幼名は周作)は安政四年(一八五七)九月、陸中国水沢(岩手県水沢市)伊達

氏の陪臣留守家臣山崎為美(戰次郎)の長男として生まれた。明治二年(一八六九)八月、水沢に胆沢県庁が設立され、(明治四年一ノ関県、さらに水沢県と改称、明治八年磐井県と再び改称)後藤新平、齋藤実らと、新任県官安場保和、野田鑑通、さらに嘉悦氏房らの給仕(学僕)となった。かれら県官の移動にともない、明治四年(一八七二)東京に遊学したかれは、たまたま、創設された熊本洋学校に入學する機会をえた。安場が、明治三年十月、熊本県権大参事試補として転任し、翌四年二月、嘉悦氏房とともに、少参事になって、洋学校創設計画に直接関係し、野田も同郷の人であつたことが、かれが遠く熊本に遊学する縁由となつた。洋学校で、かれはゼーンスの教育をうけ、奉教の志をかため、明治八年(一八七五)七月、同校を卒業した。その後、再び上京し開成学校に入學したかれは、明治十年(一八七七)八月、東京大学の學風にあきたらず、翻然として同志社に転學し、明治十二年(一八七九)六月、海老名弾正、和田正修、森田久万人、不破唯次郎、市原盛宏、伊勢時雄、加藤勇次郎、浮田和民、金森通倫、小崎弘道、下村孝太郎、吉田作弥、岡田

松生、宮川経輝らとともに、同志社余科を卒業した。その九月から新島襄の委嘱をうけて、同志社教員兼幹事(教育部担当)となり、草創期の同志社において、學問、教育、経営、伝道に中核的な活動を続けたが、明治十四年(一八八二)十一月九日、肺病で夭折した。

その奉教

かれは、海老名の回想するように、洋学校生徒の中で、ゼーンスの訓陶をうけて、いちやくキリスト教に開眼し、々やはり、ゴッドは在る」と独白して、小崎を痛憤させ、反対に、同夢の海老名を安堵させた。そして、明治八年には、山崎や伊勢、海老名らは、宣教のため、渡米留学の志も湧きおこつてきたようであつた。

こうした信仰を純粹に若い魂の中にとり入れたかれにとつて、開成学校の學問は、あまりにも智育尊重の「窮理」主義であつた。後年、内村鑑三が評したように、山崎は、まさしく、官僚、學者、明治顯官への榮進の道を捨てて、同志社に転學した。かれの信仰の姿勢は、この時期に決定的となつた。

明治十四年一月二十九日、同志社でおこなわれた熊本県人記念会(花岡山盟約記念に、かれが寄せた「信仰歌」は、「天地有正氣、名之謂信仰」にはじまる漢詩であるが、「富貴与利達、愛恰如浮雲」と信仰に生きる心懷を吐露している。

その伝道

かれの同志社生活は読書研鑽のあけくれに始められた。『同志社ローマンス』(六七刊)の伝える「氣のきいた文學書」という文學書は、屹度山崎という小印が捺してあり」というのは、こうした、かれの努力の伝承されたものであろう。同じく開成学校から転入した伊勢が、はやく伝道界に顔を出したのに比して、かれのそれは海老名、小崎などに一年おくれ、伊勢には半年おくれがある。また、森田や市原が公会の仮牧師に就任したのに対して専ら、自己の魂の深化につとめた。

明治十一年六月、かれは、日本基督教伝道会社の伝道師派遣計画にもとづいて、福知山伝道にたずさわる。『七一雜報』(三卷三三号)に、掲載された「福知山伝道記」は、かれの処女伝道報告である。〔前略〕六月二十七日、

西京を出立し、同二十八日丹波国天田郡福知山に着す(中略)旧町会所を借受、説教所となし、七月二日より説教を初たり。(中略)聴聞人は平均四十人位なれども、雨天の節は集まる人甚だ寡し。凡そ聴きに來る人は多く町人なれども、中には神主、士族などもまた見当りしなり、然れども、引き續きて來る人は少なきには実に困り入しなり(中略)説教は七月十八日まで(中略)致し續けたれど、何分日数の浅きことなれば、格別に信者とても出來ぬなれ、「十八日の晩には神主五人揃いて議論を仕掛に來りしが、畢竟此等の人は井底の蛙にて、例の通り愚論を吐れたり(下略)」と。かれの伝道は、即座に、火を叫び、熱を起し、信仰の炬火を燃上らせる体のもではなかつた。報告から受けとられるかれの風貌は、学生にして、花形伝道師のそれではない。

福知山から帰つて一週間、かれは岸和田伝道に出かける。この報告も『七一雜報』(三卷三七号)に見られる。「小弟伝道は只一カ月の見込なりし故に講義には成るだけ基督教の大切な所のみを説きしなり、聴聞人は多きときは七十人、寡き時は三十人、平常は四一五十人の間なり」、「八月卅一日帰京の見込

なりし故(中略)二十九日夜、有志輩格別の集會を催せり。同夜集會せし者廿五人程なりき、此會は小弟親しく諸氏の基督教に就て何等の考えと感じを懷たまふやを知らんが為なり(中略)我輩の最も喜ぶべきは、諸氏皆基督教を以て人間の欠くべからざる教説と信じ、且此教を信することの能はざるは、教説の惡にあらず、全太く、己の足らざるより生ずる者なれば、勉勵して倦ず怠らず、此教を研窮し、他日雲霧を開き、晴天白日を見る日あると期するの志あることなり」と。

かれは、つづけて、キリスト教と異教社会日本との距離の克服を「夫れ、學問をするには、真理を求むるの誠あり、且怠らざるの氣力ありて、一の真理をうれば、即ち之を信じ、之を實際に行ひ、其己にえたる真理を本とし、光とし、益々進んで未だ明かならざる暗黒の場所に入込未だ得ざる真理を求むること大事なれ」という。彼の奨めは、線香花火のような一時的、熱狂的信仰の勃興を求めるというより、啓蒙的であり、合理的である、真理を弁証する態度は、常に理性に訴え、論理に頼らうとするのであり、理性が最後の根拠であり、これを超越して主観的な体験と口

マンの理想を求めようとするものではない。これは、いくつかある当時の他の伝道記、伝道報告に見られぬ特色のあるもので、純粹に、かれの依拠となつてゐるキリスト教が、嚴密な意味での神学的体系としての構成を必然的に要請してゐる。きわめて注目すべき発言である。

その神學と異教社会にある大衆との距離に關して、さらに注目すべき問題が一つある。「山崎日記」(『同志社ローマンス』所収)によると、當時、白面の書生達のおこなう演説に、聴衆は少いときでも三、四百人である。いかに文明開化期とはいえ、現在のわれわれには、到底想像もできない渦潮が、そこには流れ、かつまた、巨大なエネルギーが双方から映発しなければ、毎月第三土曜日に開く普通演説會や、はては、四条北座における昼夜通しの講演會を保つ力はいらぬ。私は、ここに、山崎ら同志社の神學生たちが具有しなければならなかつた大衆への距離の姿勢が、——それはキリスト教の日本土着化の問題であるが——神學上、大きな課題としてのかかつてきた現實を注目しなければならぬと思ふ。

その神学

明治十二年一月以降、山崎は『七一難報』に變遷論（進化論）駁論の翻訳を連載し、翌十三年八月以降、かの『天地大原因論』を列載する。かれは、ここで、スペンサーの不可識論を論駁し、ダーウィンの進化論を痛撃し、神の存在の証明を宇宙論的証明、物理神学的証明で説き進める。異教的社会との距離が遠ければ遠いほど、闘志を燃やし、反キリスト教の勢力が強ければ強いほど、鋭く、冷静に、自らの体系の証を求めた人は、当時の同志社にあっては、かれの右に出る者はない。

明治哲学史上、神の存在の証明をおこなった山崎為徳の地位は従来、ほとんど看過されてきた。植村正久の『真理一斑』、小崎弘道の『政教新論』、あるいは、中村正直の「我は造物主あること信ず」などより、はるかに早く、かつ、その立論は、これらの先鞭を付していたにもかかわらず、不当にも看過されてきた。しかも、山崎の立論のもっていた欠陥や限界、すなわち、至りえなかった問題は、大きく言えば、日本プロテスタンティズムが、

そのまま内包しつつ、踏襲したものであったことも深く考えてみなければならぬ。その意味で、日本プロテスタンティズムの一流流のもった神学思想は、未完の大器山崎為徳の夭折とともに、宿命的にシンクレティズム克服の宿題を残してしまつたのだと。

その終焉

しかし、かれが、この大業を背負うことは、ことはあまりに重大であり、自らの身体は、あまりにも頑健さに欠けていた。

明治十四年六月、「二十八日、丹波亀岡に大説教あり、翌日桂川を下りて帰京す」と書いて、筆を擱いたかれの日記は、再び筆を執られることがなかった。新島は憂慮して、かれを京都病院に入院させたが、深く肺患をやんだかれは、やがて新島邸に引きとられる。膝元において、同朋ベレーに診療を依頼する便宜も考えてのことであつたらう。

たまたま、安中から帰ってきた海老名は、わざわざ神戸まで林檎を求めにはしり、水沢の子、片桐清治は先輩の枕頭で、つきっきりの看病に専念するが、天はついに、かれに寿をかさなかつた。時に、明治十四年十一月九

日行年二十四年三ヵ月であつた。

翌十日、午後二時から、第二公会堂で、新島みずから司式者となり、森田久万人が祈祷をささげ告別式が営まれた。新島はヨハネによる福音書十一章二十四節を題として、山崎の死を凝視して、終りまで心魂のくもりなく、凜烈の信仰をたもつた有様をのべ、柱と思い杖と頼んで、将来望を属したる者を失つた深い愁をのべた。「終りの日のよみがえりの時よみがえることは存じています」。これこそ、新島の会衆への勧めの言葉であるともにも、また新島自身の悲痛な信仰の表白でもあつた。同朋市原盛安は、山崎の小伝をのべ、宮川経輝、上原方立は弔文をのべ、ラーネッドが終りの祈祷をささげた。『七一難報』（六卷四七号）の伝える終焉の記は、「奮魂の使亦た奈何ともすることなし」と、如上の痛哭を簡潔にのべるものであるが、『六合雜誌』（第十四号）はかれの小伝をのべて、その業績を賞揚し、その死をいたんだのであつた。

（高校教諭・社会）